

島尾敏雄が「ヤポネシア」と呼んだ奄美群島。地理的にはその中心に位置する南の島、加計呂麻。フィールド調査に行った。人口千七百人ほどのその島で長崎にまつわる話を聞いた。島に、定年を迎えて帰郷したという男が聞いた。「島口(島の言葉)に、『ツバ』という言葉があります。唇という意味の言葉です。それが、『島原の子守唄』のなかでも使われているんですよ。長崎の方なら知っていますか？」と。そのことを私は知らなかった。

数日の滞在の後、長崎に帰ってきた。早速調べてみた。「嫁御(よめごん) 紅(べ)ンナ 誰(た)めくれた。唇(くちべ)つけたら 暖(あ)い



やまもと たろう  
山本 太郎

奄美と島原の子守唄

れた。奄美の島口と島原の方言。どこで、どのようにつながっているのか。松尾氏は島原の乱後、島原には全国から人々が移住してきた。そんなこともあって、実に豊かな方言があるとも教えてくれた。歴史の浪漫を二人の老人を通じて学んだ。

自身の専門とは違う、この小さな調査の過程で、これまで知らなかったことのいくつかを知った。

ったかる」という歌詞の中で、唇は「ツバ」と読むと、島原城資料館解説員の松尾卓次氏は教えてく

それが面白かった。その一つに、島原の子守唄。作詞作曲を手がけたのは宮崎康平ということがあ

った。盲目の古代史研究家兼詩人。『まぼろしの邪馬台国』の著者である。この歌は宮崎が、妻の出奔後、失意の中で泣く子をあやすうちにできたといわれている。

その歌詞は、貧しいがゆえに南方へ送られていった娘たちを哀れむものとなっている。明治・大正・昭和にかけて、島原、天草出身の娘たちに降りかかった不幸。多くの娘たちがからゆきとして海を渡った。それが「早よ寝ろ泣かんで オロロンバイ鬼(おん)の池ン久助(きゆうすけ) どんの連れんころるバイ」と歌われた。たかが数十年前の話にすぎない。その哀(かな)しさにしばし時を忘れた。(長崎大熱帯医学研究所教授)